

オンライン英会話による幼児のグループレッスン効果

認定こども園 つるみね保育園 園長 杉本正和

キーワード：デジタル保育 アナログ保育 ハイブリッド保育 オンライン英会話 iPad

1. 従来の課題

過疎化少子化高齢化の著しく進む地域にある小さな保育園。豊かな自然環境を生かす保育をアナログ保育と名付け、さまざまな取り組みを続けていた。しかし、過疎地だからこそ、もっと未来を見据え、好奇心探究心を伸ばす保育の必要性を感じていた。模索が続いていた5年前、iPadを活用したことで、「9割のアナログ保育と1割のデジタル保育」というハイブリッド保育が構想でき、実践ができるようになっていった。



写真1 豊かな自然環境を満喫するアナログ保育

- (2) 正しい知識を深める
- (3) 表現力・思考力・発表力を高める
- (4) 社会性・道徳心を高める
- (5) 先進性・創造性を楽しむ



写真3 デジタル保育 5つの特色（詳細はHP参照）

2. 目的

2.1 ハイブリッド保育でカリキュラムを創造

築山を駆け抜けるランニングやストライダー遊び、全職員がギター・アコーディオンで伴奏し大きな歌声が響く毎朝の音楽遊び、伝統遊び、科学遊びなど、多彩なアナログ保育を展開している日々の保育。そこに、先進的なデジタル活用を導入し工夫することで、学びを深め、魅力のある保育や教育が創造できる可能性に気がついた。そこで、国が定めている保育指針の5領域を基に、不易流行のハイブリッドな保育カリキュラムを作成し、11の未来力を育む保育実践を始めた。特に、グローバルな体験や園児のプレゼンテーション活動は重視している。



写真2 カリキュラムの構想図（詳細はHP参照）

2.2 デジタル保育の可能性を追求

保育実践を重ねる中で、デジタル保育には大きな可能性があることを確信できるようになった。そこで、次のように、5つの特色に分類することで、さらなる可能性を追求することにした。

- (1) グローバルな感覚を磨く

3. 実践内容

今回は(1)の特色に焦点を当てて紹介する。

3.1 テレビ電話で海外との交流

テレビ電話での交流は、5年目である。アメリカ、カナダ、シンガポール、中国、韓国、オーストラリアなどの幼児施設や家庭と中継し、12カ国と40回以上交流を重ねており、外国人への抵抗がなくなり、自然な流れの中で交流ができるようになってきている。ただし、さまざまな言語での交流で、筋書きのない展開を楽しんでいるため、ねらいは外国への興味関心を高めることである。そのため、英会話の習得や上達を期待しているわけではなかったのだが、この体験が、オンライン英会話と見事に融合していくことになった。



写真4 Google Earthで地理を学ぶ



写真5 テキサス州の高校生と交流

3. 2 オンライン英会話でのレッスン

今回の発表で焦点を当てるのは、株式会社ハグカムが提供する、バイリンガルとアプリを通してライブ中継でレッスンができる GLOBAL CROWN というオンライン英会話である。グループレッスンの可能性を検証するため、1週間に2回、20分ずつのレッスンを続けることにした。すると、3ヶ月ほど過ぎた頃から、一気に英会話に夢中になる姿が見られるようになった。前項で記述したテレビ電話での交流で、外国人とのコミュニケーションを深めたいという想いが育っていたことが、幼児向けの英会話カリキュラムと良い方向に結びつき、想定以上の成果を生むことになった。



写真6 自己紹介と質問を楽しむ



写真7 グループレッスンを楽しむ

これらの写真が、英会話のレッスンの様子である。状況に応じ、短焦点プロジェクターと60型モニターを使い分けている。当園では、1回の人数を5～7名ほどが適切であると判断し、グループで交代しながら、レッスンを受けるが、大きな画面の効果で、後方に控えて見聞きしているグループも学びが深まっている。

毎回、一人ずつ自己紹介と質問の応答を実施してから、イラストを活用したレッスンを展開している。

4. 成果

外国人との直接の交流も、毎月2回、重ねており、10年になるが、なかなか英会話でのコミュニケーションまでは発展しなかった。なぜ、このオンライン英会話が、短期間で大きな成果につながったのか？それは、画面の前に立って、一人ずつ英会話にチャレンジする、「**ほどよい緊張感**」が大きな要因になっていると感じている。実際に会って交流する時とは違う緊張感がある。これは、1台のiPadを活用する保育で実践検証を続けているからこそ感じている、デジタル活用の良さである。

具体的に、オンライン英会話の成果を示したい。

(1) グループレッスンのため、マンツーマンで指導を受ける時間は少ないが、しっかりと聞くことが重要で

あることを意識しているため、発音の正確さは外国人も驚くほどに高まっている。これは、iPadの英語アプリを効果的に活用していることも大きい。

(2) 普通の遊びの場面でも、お互いに英会話を楽しむ姿が見られるようになった。例えば、“What animals do you like?” “I like a tiger and a lion.” などである。andを使うのが、子どもたち同士で流行するなど、微笑ましい姿が見られる。

(3) 来園され視察される方が自己紹介される際に、質問タイムを設定している。大きな声で英語での質問をすることが楽しみになっており、英会話でのコミュニケーションを楽しもうとする姿に驚かれる。そこで、外部の方々から称賛の言葉を受けることで、さらに、いろんな質問ができるようになりたいという自発的なモチベーションが高まっている。

(4) 英語でもコミュニケーションを楽しむことができると感じた子どもたちの自信は大きい。これまで以上に、ICT活用の「プレゼンタイム」で、堂々とした発表や質疑応答ができるようになっている。「**話す**」という活動を重視しているプレゼンと英会話は相乗的に向上すると実感できている。

(5) 海外との交流の際、外国人に対しても、自然に挨拶ができ、質問のやりとりをして、意味を理解しようとする姿が見られるようになった。そのため、韓国人や中国人と交流した際も、臆することなく、相手の言語にチャレンジする姿が見られる。

(6) 利便性の悪い地域でも、よりよいICT活用でハンディを克服できることを実証できているのは、全職員の自信にもつながっている。さらに、保護者も子どもの成長に驚かされている。幼児の成果については数字で表すことが難しいため、実際の視察や、ムービーを見ていただく方法しかないが、大きな声で堂々と英会話を楽しんでいる姿を検証していただきたい。

5. 今後に向けて

先進性、そして、普及性、どちらも、十分に手応えを感じ、成果を示せる取り組みになっている。

グループレッスンでの課題は、1回の人数を何名にするか？公平に体験させるには？時間の確保は？費用は？などであるが、それぞれの施設の実情に合わせて、実践を重ねることで、創意工夫でき、改善できるはずである。大事なことは、失敗も前進だと考え、実践を継続することである。施設の実情に応じた、さまざまな実践事例が紹介されるようになれば、全国で急速に普及するのではないだろうか。

当園のような過疎地では、小学校の英語の時間にも、オンライン英会話が有効に活用できるのではと考え、今、プロジェクトを企画中である。授業に、世界中のバイリンガルを活用できるようになれば、コミュニケーションを楽しみたいという興味関心が高まり、自然な形で無理なく、英会話をマスターしたいというモチベーションが高まると確信できる。

これから、さらなる、グローバルな展開が進む未来を見据えた時、英会話の苦手意識を克服する保育や教育は必要になってくるはずである。その一つの方法として、オンライン英会話があることに関心が持たれるように、実践を重ね、事例を紹介していきたい。